

二〇二三年度

恵泉女学園中学校 第三回 入学試験問題

国語（四五分）（全二ページ）

注意 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。

二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

| |
|------|
| 受験番号 |
| |
| 氏名 |
| |

一、平田彩希は中学一年生の女の子です。国語の授業で音読をしました。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

彩希が子ども劇団に入っているという噂は、あっという間に広まってしまった。

あの音読がきっかけだ。他の子のように、無機質に抑揚なく読もうと思ったのに、もうそれは出来なくなっていたのだ。劇団でいつもトレーニングしている、

「ア・エ・イ・ウ・エ・オ・ア・オ」

という発声練習、そして文学作品の一節を取り出し、

「いかに心を込めて読んでいくか」

という稽古が、いつのまにかしっかりと彩希の声を変えていたのだ。

あの時、石川莉子と何人かの女の子が、くつくと

I をした。先生は、

「ちゃんと読んでいるだけでしよう。静かに」

と叱っただけけれど、それでも I は止まらなかった。それで先生は、一ページも読んでいない彩希に、

「はい。もういいです」

と言って止めたのだった。

その日の放課後には、もう莉子たちの聞こえよがしのお喋りが始まった。

「私さー、劇団入るコって、チョー可愛いコだと思ってた」

「そうだよねー。芸能界入るワケじゃん」

「面接とかやらないのかねー」

「やらないよー。やってたら入れないコ、いっぱい出てくるじゃん」

はつきり自分に言ってくれば、こう反論出来るのに。

「劇団はそういうところじゃない。アイドルを育てるところじゃないって、先生はいつも言ってる。演技(1)という表現方法を教えてくれるところなんだ」

しかし莉子たちはいつものように、自分たちが雑談をしているふりを装って、こちらの悪口を言い始める。

「あのさ、カン違いちがしてる人ってコワくね？」

「そう。一回主役やっちゃったりするとき、そういうつもりになっちゃう人っているらしいよね」

気にしちゃいけないだと、自分に言いきかせる。

もし莉子たちのグループに入っていたとしたら、意地悪されともつらかったはずだ。グループから出されたら他に行き場がない。

もう他のグループも出来上がっているから、そっちにも入れてもらえないはずだった。あの由紀みたいに、一人ぼっちになってしま
うんだ。

しかし彩希は、クラスの中流どころのふつうの女の子たちのグループに属していた。ここは結束が固い。莉子たち一軍のグループ
を横目に見ながら、

「あの人たち、いつも勝手なことばっかしてる」

とこそこそ言い合う仲間たちだ。

だから莉子たちに嫌われたって全然へっちゃらだと思ふものの、心は暗く沈んでいく。何かイヤなことが起こりそうな予感がする。
そしてその日の夜、桃香からのメールがあった。

「あの子、今LINEで彩希の悪口大会やってるみたい」

「ふーん」

それは予想出来たことだ。

「それでさ、びつくりしちゃうのはさ、棚橋がさ、いつのまにか石川のグループに戻ってるんだよ」

「えっ、それってどういうこと」

「あの子、『私が平田さんをたまたま劇の主演にしたから、あの人、すっかりカン違いしたんだね』とか言ってる石川にすり寄ったら

しいよ」

「ひどいじゃん」

「LINE見てみる？」

「うん……」

「じゃあ、やり方教えてあげるからやってみて」

と桃香はやり方を教えてくれた。

けれども操作することを彩希はためらった。このあいだもカウンセラーの人が学校で講演したっけ。

「知らない人とネットで話す時は充分じゅうぶんに注意するように。皆みなさんと同じ中学生を装って、実は中年のおじさんということはよくあります」

そしてもっと大事なことは、

「ネットを使って友人の悪口を言うこと」

と体育館を見渡みわたし、大きな声で言った。

「実際にネットの悪口で、自殺した人も何人もいますよ。皆さん、そういうことだけははいけません。もし自分の悪口が書かれているのを発見したら、そこで見ないようにしてすぐに親や先生に言いましょう」

ということだった。

でも私は大丈夫と彩希は思った。

「私⁽²⁾は強いもん」

ちよつと目立ったことをすれば、悪く言われる。これは中学生なら誰でも知っている世の中のオキテだ。劇団に入った時から、それはちよつぱり予想出来たことだった。

だから彩希は教えられたとおりスマホを操作した。そのとたん汚い言葉がいつぱい飛び込んできた。

「あんなブスがマジで!？」

「音読マジコワかった」

「カン違いにもほどがある」

すぐに消した。しかしいったん A にした言葉の威力はすごくて、彩希の心の奥深くつきささった。やっぱりふつうのコが、何かしちやいけなかったんだ。だからバチがあたったんだ。本当にそう思う。

「私なんかさ、やっぱり……」

言いかけて次の言葉が出てこない。つぶやいたとたん涙が出た。

「やっぱり、なんかやっっちゃダメだったんだ……」

(中略)

彩希は迷っている。劇団に通うのはとても楽しかった。演技というのは、与えられたセリフを覚えて口にすることではない。この人はいったいどういう人で、どうしてこういうことを言うのか、よく考えなさいと教えられた。自分なりに登場人物を想像する。そして、誰か〃を必死に創り出していく。演技トレーニングの日がどれほど待ち遠しかっただろう。日本舞踊ぶようの時間だって、だんだん楽しくなっていたのに……。

彩希は友人たちにメールをうった。

「劇団やっぱりやめることにした。もともと試なしに一学期だけ行ってみただけだから」

桃香うそについた嘘と同じことをここでも言った。そして、⁽³⁾彩希は自分のことがすっかりイヤになる。お母さんが口にした、

「何をやっても長続きしない」

という言葉が何度も頭の中に浮うかんだ。

自分って本当にダメな子じゃん、と思う。友だちに嫌われたくなくて、好きになったものを好きじゃないふりをしているんだ。

石川莉子たちとはあれからもずっと付き合いはない。ただLINEの悪口は消えたようだ。

「アイドルになるっていうならともかく、劇団に入るっていうのは少しも羨うらやましくなんかないんだけど、ただふつうのコが何かやる
とさ、あの人たちはムカツクみたいね」

そうか、やっぱりそうか。私はふつうの女の子として、しちやいけないことをしてしまっただと彩希は考える。でも、やっぱり納得出来ない。しちやいけないって、いったい誰が決めたんだろうか。

そんな時、劇団の赤石先生から電話があった。

「彩希、どうしてんの」

先生が、何だか懐かしい。彩希と呼ばび捨てにされるのも嬉しかった。

「年鑑出来てるよ。見においでよ」

それはテレビ局や雑誌社、広告代理店などに配布する劇団のタレント年鑑だった。先日写真を撮られ、中学生の部に彩希も載っているはずだった。

「彩希、すつごく可愛く写ってるよ。あれならオーディションいっばいくるかも。だから早くレッスンに来なきゃダメよ」

「あの……」

うまく言葉が出てこない。

「ちよつとレッスン、お休みしようかなアって思ってるんです」

「ふうーん、どうしたの」

「あの、勉強が急に忙しくなっちゃって」

「勉強も大切だけど、あれだけ一生懸命お稽古してたんだからもったいないわよ」

そして最後に先生は言った。

「何もしないでいると、ふつうの子になっちゃうもの」

彩希は小さくあつと声をあげた。ここでは「ふつうの子」がまるで違った意味になっていたからだ。

「ふつうの子になるのはつまらないでしょう」

と赤石先生は言っている。ふつうの子じゃないといじめられるから、とにかくふつうの子に戻りたいと彩希は考えていたのに、

「早く時間つくって劇団にいらっしゃい。みんな待ってるわよ」

赤石先生は言った。

アンナからもメールがきた。

「サキーどうしたの。この頃お休みじゃん。私たちこの間新しい劇やったよ。セリフいっぱいあるやつ。早く来ないと遅れちゃうよ」

あの仲間の中に戻っていききたいと思うけれど、クラスメイトのことを考えると **B** がすくんでしまう。劇団には行かなくて済む

けれども、学校に行かないわけにはいかないんだもの。

それから半月たった。土曜日の午後だった。

自分の部屋で漫画まんがを読んでいた彩希は、興奮したお母さんの声を聞いた。

「えー、すごいじゃない。へえー、本当!? すごい、すごい」

お母さんが電話で誰かと話している。

「マジでうるさい」

冷蔵庫に飲み物をとりに行くついでに文句を言った。

「ママの声がうるさくって、勉強全然出来ないじゃん」

「だってね、来週美冬ちゃん、ドラマに出るんですって」

「えー!」

「美冬ちゃん、オーディションに受かって、来週の『サスペンス劇場』に出るんだって」

「サスペンス劇場」と聞いて彩希はちょっと心がなだらかになった。なぜならこの番組は単発だからだ。連続ドラマならすごく嫌な気分になったと思うけど、

「へえー、すごいじゃん。それで何の役?」

お母さんに、嫉妬しつとしてるなんて思われたくない。だからすごく明るい声を出した。

「何でも犯人の娘役らしいよ。ちょっとしか出てこないって。しかも回想シーンなんだって。でもね、ちゃんとテレビ局のオーディ

シヨン受かったって、玲子は大喜びしてるのよ」

玲子おばさんはちよっぴり太っていて、彩希のお母さんの妹だが、フケてお姉さんに見える。それなのにどうして、美冬みたいなコが生まれたのか、親戚中が不思議がっている。

「これをきっかけに、プロダクションもがん売り出すらしいわよ。本当にすごいわねえー」

「ふうーん」

(中略：お母さんが出かけているときに、彩希は美冬の出ている「サスペンス劇場」が気になって見てしまいます。)

彩希は美冬の演技に呆あきれてしまった。発音もよくないし、何よりも「演技しています」という感じがミエミエだ。

赤石先生だったらこう言うに違いない。

「可愛く見せよう、可愛くものを言おう、なんて考えちゃダメ。人に何か言う時の顔を、鏡でよく見てごらんなさい。口角を上げて喋しゃべってないでしょう。あんなことをするのは、女子アナとお天気お姉さんぐらいよ。わかってるわね」

そうだよ。こんなの演技じゃない。パチッとスイッチを消した。

「こんなので、テレビに出たって得意がってバカみたいじゃん」

思わず声に出してびっくりした。後ろにお父さんが立っていたからだ。

「えっ、いつ帰ってたの」

「お母さんに録画頼まれてるの忘れてて、急いで帰ってきた。そしたら彩希がものすごい顔で見てるから……」
声をかけづらかった、ということらしい。彩希は恥ずかしくてたまらない。けどお母さんにだけは見られなくて本当に良かったと思う。

「彩希、負けるんじゃないぞ」

突然お父さんが言った。

「こういうコに負けんなよ」

「……」

「世の中、頑張るコと運のいいコがいる。運のいいコの方が最初は前に出ていくけど、残るのは頑張るコの方だ。わかったな」

うん、と彩希は頷いた。それからお父さんは彩希の頭を撫でた。

「頑張るコは目立つ。でもそれでいいんだ。頑張ることを馬鹿にする奴らを、彩希は笑ってやれ」

⁽⁵⁾ 彩希はもう少しで涙が出そうになった。

問一 [I] に共通してあてはまる語として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 高笑い イ あいそ笑い ウ 作り笑い エ しのび笑い

問二 演技⁽¹⁾という表現方法 とありますが、彩希は演技をどのようなものとらえていますか。解答欄^{らん}に合うように本文中からそれ

ぞれ一五字以内で抜き出しなさい。

演技とは、() A…一五字以内 () し、() B…一五字以内 () こと。

問三 私は強いもん⁽²⁾ とありますが、このときの彩希の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 講演会で教わったようにネットには何が書かれているか分からないので、見るのをやめようと自分を納得させている。

イ もし自分の悪口をネットに書いている人を見つけたら、親や先生に言いつけやりこめてやろうとほくそ笑んでいる。

ウ ネットにどんな自分の悪口が書かれていたとしても、気にしないでいられるはずだと自分に言い聞かせている。

エ 自分は劇団の中で有力なメンバーなので、ネットに悪口が書かれていても仕方ないとあきらめている。

問四 A、 B にはそれぞれ体の一部を表す漢字一字が入ります。それぞれ漢字で書きなさい。

問五 彩希は自分のことがすっかりイヤになる ⁽³⁾とありますが、このときの彩希の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 実力が足りていないことを素直すなおに認められない自分にうんざりする気持ち。

イ 周囲を気にして好きなものを堂々とさえ言えない自分に向かって自分がかたがたする気持ち。

ウ 友人たちに平然とうそをついてしまうくらい自分を恥はずかしく思う気持ち。

エ 困難にぶつかるとすぐにくじけて逃にげてしまう自分を反省する気持ち。

問六 ⁽⁴⁾「ふつうの子」がまるで違った意味になっていたとありますが、どのように違うのですか。説明しなさい。

問七 ⁽⁵⁾彩希はもう少しで涙が出そうになったとありますが、なぜですか。説明しなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

細部の忘却や変容という事実は、誰もが日常的に経験して知っていることです。たとえば、他人と話した内容に関しても、あとから一語一句正確には思い出せないのがふつうです。ところが、無意味綴りや単語を使った実験では、記憶テストをしても、「思い出せる」か「思い出せない」かのイチゼロの形式となるので、現実の記憶にあてはまらないことが長い間、見落とされていたのです。要するに、私たちは丸覚えをする存在ではなく、そこに必ず「意味を求める存在」であるために、記憶の細部は忘れ去られ、本質的なものだけが記憶されるのです。

私たちが「意味を求める存在」であるという原則は万人に当てはまるのですが、そこに、どのような「意味を見出すか」(意味づけないしは解釈)に関しては、一人一人異なることが少なくありません。いわば、それぞれの人間が自分専用の色メガネを通して覚えているのです。

この点に関連し、意味づけの重要性を明確にした^(注)ポートレットによる『想起の心理学』が出版されたたちょうど同じ年に、⁽¹⁾あいまいな絵を使った面白い実験が行われました。たとえば、図1の三枚の絵は、それぞれ何に見えるでしょうか。



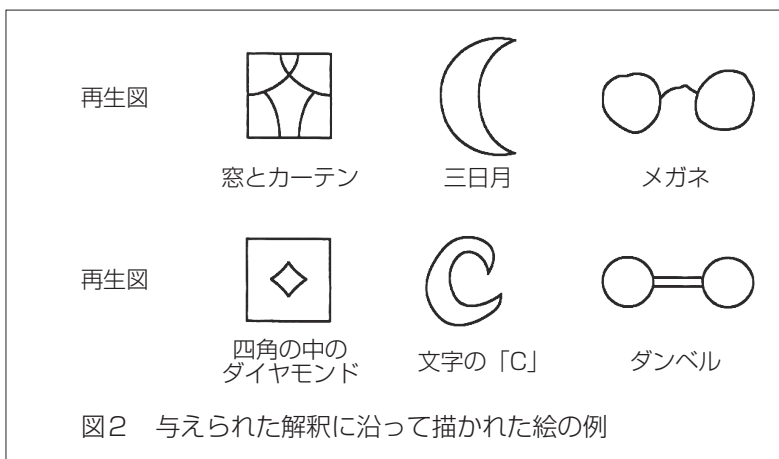
図1 実験で使われたあいまいな絵の一部

(注) ポートレット：イギリスの心理学者。

この三枚は、この実験で実際に使われた絵のごく一部です。実験では、このようなあいまいな絵を見せて、あとで思い出してもらいました。ただし、絵を見せる際に、何人かの参加者には、それぞれの絵は何をあらわしたものであるかという解釈も聞かせてみました。たとえば、図1の一番左の絵であれば、「窓とカーテン」という解釈を与えられた参加者もいれば、「四角の中のダイヤモンド」という解釈を与えられた参加者もいます。残りの二枚は、それぞれ「三日月」か「文字の『C』」、「メガネ」か「ダンベル」のどちらかの解釈を聞かせました。こうして、それぞれの絵に対して二種類の解釈のいずれかが与えられてから、あとで絵を思い出して描いてもらいました。

すると、最初に見せた絵と完全に同じ絵は、全体のわずか九%でした。つまり、残りの九一%は、もとの絵とは異なって思い出されたわけです。しかも、このとき、もとの絵からずいぶんと異なって思い出された絵の七三〜七四%は、与えられた解釈に類似した絵に変形されてきました。図2は、二通りの解釈のどちらかを与えられた者が、それぞれ思い出して描いた絵の例です。もともと同じ絵であっても、どのように解釈するかによって記憶が変形してしまふということがよくわかります。

バートレットは物語を使った実験によって、私たちが「意味を求める存在」であるということを示しました。しかし、この



ことは、物語を思い出すという場合だけに限定されるわけではありません。

A ではない本質的な「意味を求める」という私たちの傾向は、私たちが日々体験する出来事の記憶に関しても見受け

られる根本的な特徴です。私たちは、自分の体験したさまざま出来事を何の脈絡もない形で記憶に残すのではなく、

B

のともなわれる「物語」のように意味づけて記憶に残すのです。バートレットがそれを意図していたかどうかはわかりませんが、無

意味綴りを使ったエビングハウスと違い、彼が材料として物語を使ったのは、まさに卓見でした。

C、自分の身に起こった出来事を「物語」のようにして記憶するとは、いったいどのようなことなのでしょう。ここで

は、私が記憶の心理学を研究するようになった進路選択の「物語」を例として取り上げてみましょう。

高校時代、夢や無意識に興味をもっていた私は、漫然と大学で「人間の夢や無意識について勉強してみたい」と思っていました。

そんな高校三年の秋に、夏目漱石の『こころ』を読み、人間の心の奥底に潜む利己主義のおぞましさ^{しやうげき}に激しい衝撃を受けたのです。

D、夢や無意識に対する漫然とした興味が、『こころ』を読むことで、「大学では心理学を学ぶのだ」という強い志望へと変

わりました。

E、大学で出会った心理学は、動物の行動の話ばかりで、思い描いていた心理学とあまりにも違いました。いつしか心理

学そのものに失望し、大学をやめようとさえ考えるようになっていました。その頃、たまたま一年生のゼミで、記憶の章を私が発表することになりました。発表の準備のために勉強してみますと、実験という手法によって人間の記憶を調べるというアプローチがと

(注) エビングハウス：ドイツの心理学者。

(注) 卓見：優れた考え。

ても面白く感じられました。そして、発表が終わってからは、つかみどころのない夢や無意識ではなく、記憶の心理学に関する本を読みあさるようになったのです。

F 私は高校までの暗記中心の授業がいつも苦痛で、少しでも楽に覚えるために、どの科目でも語呂合わせを作っていたほどで、もともと記憶のしくみにも強い興味をいだいていました。このような自分自身の体験と記憶の心理学というテーマがうまく合致し、記憶についての関心が急速に深まり、やがては大学院へと進学し、今に至っているわけです。

これが私の進路選択の「物語」です。もちろん、高校時代から大学時代にかけて、ほかにも多くの出来事があり、それぞれの「物語」を形作っています。このように、私たちの記憶は、さまざまな出来事が無味乾燥むみかんそうに並んでいるのではなく、それぞれのテーマにまつわる「物語」として、関連した複数の出来事が集められて（意味づけられて）いるのです。

私たちの記憶の「物語」とは、おおよそ次のような手順で作られられます。まず、「物語」のテーマないしはゴール（先の私の例では、「心理学の道に進む」）が明確にされなければなりません。次に、ゴールに関連する複数の出来事（『『こころ』との出会いなど』）を選ぶこととなります。そして、これら関連する出来事を時間順に並べたり、それらを因果的に関連づけることが行われます（「たまに発表した箇所かしよが面白かったので、記憶の心理学に関する本を読むようになった」など）。こうして、それだけではバラバラであった複数の出来事が、それぞれのテーマごとに「物語」としての意味をもつようになるのです。

さらにまた、これらの個々の「物語」を束ねる根幹をなすのが、「人生の物語（ライフ・ストーリー）」と呼ばれるものです。「人

生の物語」という概念は、実に幅広いもので、単なる自分の人生の記憶の集まりだけを指すものではありません。この「人生の物語」は、とりわけ自分の存在や自己同一性（アイデンティティ）と密接に関わっています。

つまり、私たちの多くは、青年期に「自分が何者であるのか」「人生で何をしたいのか」「何のために生きるのか」といった自己の内面に対する問いをもちます。このような問いに対する答えの一つとして、それまでの自分の身に起こった出来事を束ねて「人生の物語」が生み出されるのです。

記憶の心理学では、エビングハウス以来、長年にわたって、覚えたものをそっくりそのまま再現することに価値が置かれていました。二〇年ほど前に、ある研究者から、「記憶なんて研究していて面白いか？」と聞かれ、答えに詰まったことがあります。その研究者は、正確な再現だけに価値を置く記憶研究の無味乾燥さを指摘したのです。

しかし、バートレットが物語を材料として見出した「意味を求める存在」としての人間観がもとになり、「物語」や「人生の物語」といった新しい研究分野が生み出されてきました。そこでは、もはや必ずしも正確な再現に価値が置かれていません。今なら、「記憶なんて研究していて面白いか？」という問いに対して胸を張って答えることができます。⁽²⁾「過去から未来へ向かって生き続ける一人一人の人間の存在との関係で記憶をとらえる、これほどワクワクする面白い分野はありませんね」と。

（高橋雅延『記憶力の正体——人はなぜ忘れるのか？』）

問一 ⁽¹⁾ あいまいな絵を使った面白い実験 とありますが、実験の意図として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 与えられた解釈が記憶にどれくらい影響するかを調べること。
- イ どのように絵を解釈すると記憶しやすいのかを調べること。
- ウ 三枚の絵の中で最も記憶しやすい絵はどれかを調べること。
- エ 完全に再現できる人はどれくらいいるかを調べること。

問二 A、B にあてはまる四字熟語を次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 千差万別 ばんべつ イ 起承転結 ウ 本末転倒 てんとう エ 創意工夫 オ 枝葉末節 しよう カ 一部始終

問三 C、F にあてはまる語として最も適切なものをそれぞれ次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使つてはいけません。

- ア こうして イ 実は ウ ところが エ それでは

問四 過去から未来へ向かって生き続ける一人一人の人間の存在との関係で記憶をとらえる ⁽²⁾とありますが、筆者は記憶をどのような

なものと考えていますか。解答欄に合うようにAは一五字以内で、Bは二五字以内でそれぞれ説明しなさい。

記憶とは私たち一人ひとりが () A…一五字以内 () に答えるため、

() B…二五字以内 () ものと筆者は考えている。

問五 次のア～エの文について、本文の内容として正しいものには「A」を、そうでないものには「B」を書きなさい。

ア 従来の記憶の心理学では、人間の記憶を正確に再現することが重視されていた。

イ 筆者は、無意識の内にひそむ利己主義の不思議さを明らかにするために心理学を専攻した。

ウ 私たちは「意味を求める存在」ではあるが、結局「意味を見出す」ことはできない。

エ バートレットが示した新たな人間観は、記憶の研究分野に大きな変革をもたらした。

三、次の①～⑤の文のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 企業のシユウシヨク試験を受ける。
- ② 応募作品中で彼の絵はアツカンの出来だった。
- ③ 議員のコウホ者として名前を連ねる。
- ④ 判決についてカンケツな説明を求める。
- ⑤ 少人数でヘンセイされた楽曲を弾く。